



# 日本とイスラム世界をつなぐ 精神的価値、テクノロジー、日本の支援

(一社) 現代イスラム研究センター

理事長 宮田 律

イスラム世界と日本では似た価値観や精神性があることに気づく。また、日本人の高い倫理性は、サウジアラビアのテレビ番組「ハワートイル (改善)」でも紹介されたように、イスラム世界では広く評価されている。自動車や家電、カメラを含む精密機器など日本のテクノロジーへの篤い信頼があることはいまさら強調するまでもない。2011年の東日本大震災では中東イスラム諸国から多くの支援が寄せられたのは日本が地道な支援を継続するなど良好な関係を築いてきたからに他ならないだろう。以下では、あらためてイスラム世界と日本をつなぐ精神的価値、日本に対する評価を紹介し、また今後日本がどのような関与を中東イスラム世界に対して行うことが可能かを考えてみたいと思う。

### 良好な対日感情の歴史的発展

アラビア語の「フトゥワーワ」は、「若者らしさ」を意味するイスラム的倫理、つまり正義の遂行、言行一致、勇敢さ、忍耐などをその徳目とする。

現在、代々木上原にある東京ジャーミイのイマーム (導師) を務めるヌラフ・アヤズ師は「日本人の国民性とムスリムのあるべき姿との間には共通点が多い」と話している。彼は日本人の伝統的価値観としてある「高潔」「誠実」はイスラムでも尊ぶ価値観であると語る。

以下は、日本事情を世界に発信するニッポン・

コムページにあるアヤズ師のコメントだ。

「日本の歴史で、残念ながら長い間、イスラム世界との直接の接触はありませんでした。イスラム教徒がある一定の集団で日本に入ってくるのは、20世紀に入ってからです。東京にモスクができたのも、ロシア革命 (1917年) で難民となったタタール人の手によるものでした。彼らは中央アジアのトルコ系の民族で、シベリア、中国を経由し、日本にやって来ました」

<http://www.nippon.com/ja/features/c01301/>

日露戦争の頃から第二次世界大戦に敗北するまでの間、日本の国策として、回教 (イスラム) 圏との連帯が唱えられた。この政策に呼応するように、ロシア革命後の混乱と内戦から少なからぬタタール人たちが日本を訪れたり、亡命したりしてきた。

その中でもイスハキ (1878~1954) は、現在のタタールスタン・カザン近くの村落でムッラー (宗教指導者) の家庭に生まれ、タタール語で新聞記事や小説を世に送り、ロシア革命の状況下でヴォルガ (イデル) = ウラル国家の実現を目指して活動し、その極東での運動基盤の構築を図って日本を訪問した。

同じくタタール人で、日本のイスラム研究の発展にも大きな足跡を残したアブデュルレシト・イスラム (1857~1944) はロシア帝政の抑圧を逃れて1907年に初めて訪日した。彼はロシアなどヨーロッパ帝国主義による支配を嫌い、

アジアの日本にイスラム世界やムスリムを解放する期待を寄せた。アブデュルレシウト・イブラヒムも「日本人は清廉で勤勉、道徳的で高潔な、イスラム教に改宗しさえすれば完璧なムスリムになれる人々」と考え、日本人が優れているのは、古い慣習を守るのではなく、それを刷新して国を創り、さらに発展させている点であることを強調した。

## イスラムの「ジン」の世界

「獣の奏者」や「精霊の守り人」などの著作で有名な上橋菜穂子さんが2014年3月、国際アンデルセン賞の作家賞に選ばれた。

「精霊の守り人」は「老練な女用心棒バルサは、新ヨゴ皇国の二ノ妃から皇子チャグムを託される。精霊の卵を宿した息子を疎み、父帝が差し向けてくる刺客や、異界の魔物から幼いチャグムを守るため、バルサは身体を張って戦い続ける」というものである（新潮社のページより）。

「精霊」はイスラム世界では広く知られる超自然的な存在で、「ジン」と呼ばれ、「アラジンと魔法のランプ」でもアラジンに従う魔物として登場する（「ジン」というキャラクターは「精霊の守り人」にも登場する）。ムスリムになった良いジンと、異教徒のままの悪いジンがいて、後者は悪魔である「シャイターン」など様々な名称がある。ジンは人に幸福をもたらす場合もあれば、人間がジンに危害を加えようとすれば、復讐として病気などの災難をもたらす。「悪魔は篤信の徒を、王者は貧者を制することができない」（イランの詩人サアディーの言葉）。

ジンは変幻自在で空中を飛翔することもできるし、人間の目に見えないことが多い。アラブ世界では荒野を走る砂の竜巻も性悪なジンが暴れまわっていると考えられ、「鉄、鉄」と連呼するか、「アッラー、アクバル（神は偉大なり）」と叫べば、これを避けることができるとされる。

## 筆者紹介

1955年山梨県甲府市生まれ。慶應義塾大学大学院文学研究科、カリフォルニア大学ロサンゼルス校（University of California, Los Angeles）大学院修了。現代中東論、現代イスラーム研究専攻。一般社団法人現代イスラーム研究センター理事長。静岡県立大学国際関係学部准教授。著書に『中東危機のなかの日本外交』（NHKブックス）、『紛争の世界地図』（日経プレミア）、『南アジア世界暴力の震源地』（光文社新書）、『イスラム世界おもしろ見聞録』（朝日新聞出版社）、『中東イスラーム民族史』（中公新書）、『現代イスラームの潮流』（集英社新書）など。

ジンの存在は私たちから見れば、荒唐無稽かもしれないが、現代人に起こる災難、つまり戦争、犯罪、交通事故などもジンの仕業といえるかもしれない。

## 寓意を重んずるイスラム神秘主義と日本の禅

2000年9月、ニューヨークの国連本部でユネスコの松浦晃一郎事務局長の司会のもと、「文明間の対話」準備の首脳会議が開かれた。その際、イランのハタミ大統領（当時）は、「経済指標や破壊的な武器が支配する世界ではなく、道徳・謙虚さ、そして愛が支配する世界で生存していくという希望を実現したい」と述べた。

キリスト教徒から「金門」と呼ばれるエルサレムの旧市街の城壁にある門は現在閉ざされている。城壁には全部で8つの門があるが、「金門」はユダヤ教徒、ムスリム（イスラム教徒）からは「慈愛の門」と呼称される。

イスラエルのラビ（ユダヤ教の律法学者）のシャイ・ハルエルは近著の *Where Islam and Judaism Join Together: A Perspective on Reconciliation*（イスラムとユダヤ教はどこでつながるのか：和解への展望、Palgrave Macmillan, 2014）の中で、イスラムとユダヤ教は共通の歴史をもち、預言者アブラハムの価値を共有し、平和や調和へのヒューマンな渴望があると説く。

2014年5月30日、ベルギー・ブリュッセルの

ユダヤ博物館でイスラエル人観光客らが過激なムスリムに殺害された事件が発生するなど偏狭な宗教的考えから、物騒な事件も発生しているが、イスラムの側からもシャイ・ハルエルの訴えは共感されるはずである。

2000年11月に来日したイランのハタミ元大統領は日本の禅とイスラム神秘主義がともに沈黙の中から多様な示唆と寓意を読み取ること、相手の言うことに耳を傾け、相互に理解し合うのがアジア（日本とイランを含めて）の精神風土だと語った。

「文明間の対話」は異なる文化を背負う者たちが相互に理解し合うことを目指すもので、日本ではかつて外務省の事業として日本とイスラム文明との対話があったが、また民間のレベルでも達成しうるものでもある。

#### 日本の技術力とポップカルチャーへの評価

JR 東海など JR 4 社は、海外の高速鉄道計画に日本の新幹線方式が採用されることを目指して「国際高速鉄道協会」を設立し、海外への売り込みに力を入れることになった。

東南アジアで、世界最大のイスラム教徒を抱える国のインドネシア（1億7,000万人を超える）では、日本の中古電車車両が高い評価を得ている。2013年11月には180両の205系の中古電車がインドネシアに有償譲渡された。205系はステンレス製だから100年の耐久性をもつともいわれる。

国際協力機構（JICA）によれば、中古車両の譲渡要請が多いのはこのインドネシアとフィリピンだそうだ。日本の中古車両には輸送力改善の期待がかけられる。インドネシアでは輸送力改善の希望として日本の中古車両に寄せられた期待は大きいようで、JICAによれば、日本の車両は「途上国でもメンテナンスしやすい設計になっている点と、丁寧に扱われてきたため中古車両でも品質が非常に高いと評判」という。

日本から譲渡された車両には日本での到着地や「女性専用車」「優先席」といった日本語の案内が貼られたままで、それがパキスタンやアフガニスタンなど南アジアにも見られるように日本製であることを訴える一つのステータス・シンボルになっている。

国際交流基金のジャカルタ事務所長・小川忠氏は2012年3月に東ジャワ州ボノゴロにある著名なブサントレン（イスラム寄宿学校）を訪問した時に、日本人とも話したことがない青年たちが、東日本大震災の発生後に被災者が示した勇気、自制、寛容の心、厳しい状況のなかでも再び立ち上がろうとする不屈の精神に感動し、「がんばれ、日本！」と声援を送ってくれていることに感動したという（小川忠氏「ジャカルタ」通信より）。

小川氏は、近年高まる日本語学習熱の背景には、日本のアニメと日本企業の進出が動機だと語っている。日本語を学ぶことによって日本のアニメをよりよく理解できることに期待を寄せるインドネシア人学生もいるが、日本語の学習は日本の労働倫理、時間管理、また鉄道など技術の習得にも役立つと考えられている。

このインドネシアと同様に、マレーシアでも日本のアニメやマンガなどのポップカルチャーに影響されて日本語学習熱が高まるなど日本文化への関心が高い。

マレーシアは1957年にイギリスからマレー半島部11州で構成するマラヤ連邦として独立し、さらに63年にシンガポールとボルネオ島の2州が加わってマレーシア連邦を形成した。そして65年にシンガポールが独立して現在の国家形態となった。

このマレーシアでの日本の軍政下、石川達三、井伏鱒二、清水幾多郎などが「ペン部隊」や宣伝・報道要員として派遣された。その中でも井伏鱒二はシンガポール（日本統治下では「昭南特別市」と呼称されるようになった）で「昭南

タイムズ」の社長を務めながら、「昭南日本学園」で日本語や日本史の講義も行ってた。

マレーシアの若者たちの日本文化への関心をいっそう高めたものに、1982年に始まる「東方正政策」とともに、ゲームやアニメ、マンガ、ドラマ、音楽などが輸入されたことがある。漫画家志望の若者も年々増えているという。だが、マレーシアはイスラム国家のために、暴力や肌の露出などが多いものは放送禁止になったこともある。

[http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/lcs/kivou/pdf\\_21-3/RitsIILCS\\_21.3pp83-93YAP.pdf](http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/lcs/kivou/pdf_21-3/RitsIILCS_21.3pp83-93YAP.pdf)

2010年末の時点で、日本で学んでいるマレーシア人留学生数は、中国、韓国、台湾、ベトナムに次ぎ5番目に多い2,465人で、そのうちマレーシア政府による給費留学生は1,300人で、マレーシア人の留学先とすれば、日本はイギリス、エジプトに次いで3番目に多い国となっている。マレーシアの学生たちは、現地の日本大使館や国際交流基金が主催する日本語関連事業に積極的に参加し、日本語作文大会でも入賞する者が多い（外務省のホームページより）。

#### 中東の安定に貢献してきた日本人たち

日本の JICA（国際協力機構）は中東安定化のカギとして、アフガニスタン、イラク、パレスチナに対する平和構築・復興支援をこの地域の最重要課題として取り組んできた。以下は、松永秀樹 JICA エジプト事務所長からのページの抜粋である。

「イラク人の日本に対する期待は当初から高かった。私は2003年夏、北部のエルビル、キルクークやバグダッドなど、イラク各地を調査のため訪れたが、視察した多くの施設で親日的なイラク人に会い驚いた。いろいろな日本人の名前を耳にした。日本製品・技術に対する信奉に加え、在留邦人が数千人規模であった1970年代、80年代に活躍した日本企業および日本の

ジネスマンの活躍の記憶がまだ色濃く残っていたのである。…日本企業の美徳の一つが、一度請け負った契約は遂行する責任感である」

[http://www.jica.go.jp/topics/scene/20130319\\_01.html](http://www.jica.go.jp/topics/scene/20130319_01.html)

イラクでは、1970年代、80年代に数千人の在留邦人が活動していて、その実直で、真面目な仕事ぶりは現地で高く評価されていた。

以下は毎日新聞編集委員・西川恵氏の文章だ。「湾岸危機のとき私は1カ月ほどバグダッドに滞在したが、撤退する日本のプラント建設関係者が『日本人は欧米諸国の人間と異なってくれわれイラク人を同等に扱ってくれた。また戻ってきてくれ』と言って、抱きついて別れを惜しんだという話を取材した。あまり表には出ないが、海外に進出した地道で真面目な日本人の仕事ぶりが、イスラム世界の日本に対する評価と信頼に寄与していることは知っておいていい」（『よくわかる「今のイスラム」』（集英社、2001年）より）。

アフガニスタンのナンガハル大学児童心理学教員アブドゥル・ラシッド・マリクザイ氏は、日本から贈られた絵本に感謝して、「アフガニスタンの子どもたちは今でも、戦争や自爆テロのまねをして遊んでいます。楽しい絵本を読むことによって、子どもたちにやさしい気持ちが生まれてくるでしょう」と述べている（シャンティのページより）。

<http://sva.or.jp/activity/oversea/afghanistan/thanks.html>

以下は「いい話の新聞」に掲載されたアフガニスタンで支援活動を行う中村哲医師のコメントである。30年あまりにわたって現地と関わってきた中村医師の観察だからアフガニスタン人の感情を正確に伝えているだろう。

「アフガニスタン国内での日本びいきは相当なもの、特にソ連軍侵攻の影響でしょうか、ほとんどの人が『日露戦争、ヒロシマ、ナガサ



キ』を知っているのには驚かされました。

ある若者に日本に行きたいのでお金をためているが、ここから歩いてどれくらいかかるのか?と質問されて言葉に詰まったことがありました。

『もう戦争は嫌だ!』というのが正直な一般市民の声でしょう。

水や食べ物があってうれしい。平和な暮らしがしたい。病気が治ってうれしいなどといって喜ぶ姿は善悪を超えて万人共通のものです」

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~izanami/iihanashi/nakamuratetu.htm>

米軍は2016年に撤退する予定だが、この撤退を契機にアフガニスタンが再び1990年代のように「忘れられた国」になり、これまでの日本人の支援が無駄にならないことを望むのは現地です。支援活動を行ってきた人たちが共通してもつ思いに違いない。

#### おわりに—継続して期待される日本の支援

フィリピン・ミンダナオ島に住む二人の日本人が武装組織・モロ・イスラム解放戦線 (MILF) の支配地域 (ミンダナオ島西部) の人々の生活手段としてソバの栽培を提案して、今年は15の農家の協力で30トンのソバの収穫に成功したという。日本の食品加工会社を通じて、今年中にもミンダナオ産のソバが日本のコンビニなどの店頭で売られるという (NHK 記事による)。

フィリピンで最も貧しいとされるミンダナオ島西部は、40年以上も戦闘が行われてきた地域で、人々が生活手段を得ることは社会の安定や平和構築にも貢献するものである。

2008年2月に MILF の支配地域を訪ねた時、コミュニティの指導者は日本の支援に感謝していた。日本の JICA (国際協力機構) は、ミンダナオ島の安定や平和構築のために、教育支援に加えて、保健所、簡易給水施設などのコミュニティ施設や道路など、地域の拠点となるイン

フラ整備を支援してきた。武装組織の支配地域に JICA が支援を行うのは初めてのことで現地で聞かされた。

2014年3月、MILF はフィリピン政府と包括和平協定に調印したが、和平が永続するためには民生の安定が欠かせない。和平実現のために日本はこれまで貢献してきたし、そのための努力を払ってきた人たちの努力は、近隣の国であるフィリピンと日本の良好な関係を築くものであるに違いない。

近年あまり見られなくなったが、たこ揚げは日本の正月の子供たちの代表的な遊びだったが、このたこ揚げがパレスチナの子供たちの心の癒しになっている。2008年12月から翌2009年1月にかけてイスラエルはパレスチナのガザ地区を攻撃し、この攻撃による犠牲者は子供300人を含む1,400人を超えたが、その年の7月、ガザの子どもたちは6,000人以上が参加してギネス世界記録に挑戦し、パレスチナ和平に思いを寄せた。さらにガザの子どもたちは2011年7月に12,350のたこを同時に揚げ世界記録を更新した。たこ揚げはガザの子供たちに希望を与えることになっている。

東日本大震災が起こると、その翌年から3月11日にガザでは子供たちが大震災の犠牲者を追悼し、また復興への願いを込めたたこを揚げるようになった。戦争によって家屋を破壊されたパレスチナの子供たちには震災の被害者たちの心の痛みが理解できるのだろう。2013年3月11日に行われたたこ揚げに子供たちがもちよった手作りのたこには、日の丸やパレスチナの旗が描かれ、アラビア語で「日本」などと書かれたものもあった。このたこ揚げは、国連パレスチナ難民救済事業機関 (UNRWA) が企画し、その日本人職員たちも支援を行っている。たこ揚げは日本とガザの子供たちの心を結ぶ媒体となっている。

「アラブの春」によって混乱したエジプトでも

日本との関係、日本からの支援は評価されている。2014年は、池田長発（いけだ・ながおき、1837～1879年）を正使とする遣仏使節団がフランス訪問途中に、1864年に日本人として初めて、ギザのピラミッド、スフィンクスを訪れ、スフィンクス前で記念撮影をしてから150周年にあたり、日本のエジプト大使館はこの訪問を日本とエジプトの友好関係の端緒としている。

江戸時代末期、攘夷論が高まる中で、1863年10月に横浜近郊でフランス軍士官が殺害される井土ヶ谷事件が起きた。幕府は事件へのフランスの非難と攘夷派の意向を応じるために、謝罪と横浜港をフランスなど外国に対して閉鎖するための交渉を行わせるために、池田ら34人をフランスに派遣した。

当時はスエズ運河が開通しておらず（建設開始1859年、完成1869年）、陸路でカイロに到着した。スフィンクスに関するある一行の感想は「肩から下は砂に埋まって見えない。どうしてこんなものを作ったのか」というものだったという。

日本は JICA（国際協力機構）が2010年2月に、「エジプト日本科学技術大学（Egypt-Japan

University of Science and Technology : E-JUST）」を開校し、エジプトの人材育成に努め、エジプト大博物館の建設など観光資源を支援するなどの事業を行っているが、エジプトでも日本の技術に対する厚い信頼がある。エジプトが政治的な安定を回復させれば、日本の支援はさらに有効になっていくだろう。

これまで述べてきたように、日本の中東イスラム諸国に対する様々な支援は、現地社会の安定や発展に寄与・貢献するだけでなく、日本のイメージを良好にし、現地で活動する日本人たちの安全をも高めるものでもある。日本に対する良好な感情は日本と中東イスラム諸国との経済関係をも円滑にし、さらに発展させるものである。日本の技術に対する信頼は根強くあるし、また日本人の勤勉で、真面目な勤労姿勢は広く共感をもたれ、日本のポップカルチャーは中東イスラム諸国の若者たちの心を幅広くとらえている。日本の中東イスラム世界に対する関与は、これまで日本の先人たちが築き上げてきた資産を大事にしてさらに発展させるものであってほしい。